

日蓮筆富木常忍宛仮名消息について

川上 大 隆

一、はじめに

二、富木常忍について

三、富木常忍宛仮名消息について

(一) 身延山入山直後まで

(二) 身延山入山初期

(三) 身延山入山中期

(四) 身延山入山後期

四、おわりに

一、はじめに

日蓮(一一二二—一一八二)は鎌倉時代の祖師の一人として知られ、仏教経典である法華経を弘めるために他宗を激しく批判し、鎌倉幕府からは二度の流罪、他宗徒からは襲撃に遭うなど波乱に満ちた生涯を送っている。日蓮はそうした布教活動の中で、門下や門弟に多くの曼陀羅や消息を認め、現在その真筆は曼陀羅一七幅、著述一〇編、写本・要文集二七編、図録二三編、申状一通、問答記録一編、草案三編、消息(漢文体が三六通、仮名は断簡を含めると一五〇通以上、漢文と仮名で書かれたもの三通)^①、その他一行から数行の断簡類が数多く伝えられている^②。

ところで、日蓮の書に関して多くの論考がある。それらの論考は、曼荼羅や消息、著述について論じられたものであるが、主に日蓮の消息に注目されたものが多い。その消息についての指摘は、日蓮の書は破格、あるいは人間的性格が躍如として

いる。信徒への熱い思いが反映している。心情を直截的に表しているなど、日蓮の消息は形式に捕われず自由奔放で、最も日蓮の人間性を表すものとされている。また、宛所によって書きぶりを変えているとの指摘もある。

「書は人なり」と言われるが、そうした日蓮の書と人物とがどのように関連しているのだろうか。

本稿では、これら従来の指摘を踏まえながら、日蓮の最も早い頃からの信者で、多くの書状が送られた富木常忍宛の消息に注目したい。富木氏宛の消息は漢文体が一三通、漢文体で一部仮名のもので一通、仮名(漢字仮名交じり)が七通、前半が漢文体で、後半が仮名のもの三通の計二四通が現存している。本稿では仮名消息七通について、消息が書かれた背景や内容、年代的な書風の変遷について考察してみたい。

二、富木常忍について

日蓮が富木氏に宛てた手紙を考察するにあたり、富木氏の略歴と日蓮との関係について触れておきたい。

富木常忍(一一二一—一九九)は下総若宮法華経寺の開山で、常修院日常といい、日蓮の最も早い時期からの信者で、日蓮は少時常忍の資縁によって勉強したとも伝えられている。

富木氏はもと因幡国法美郡富城郷(鳥取県)に居住していたと思われる、常忍の父富城中太入道蓮忍のころ関東に移住し、下総国八幡庄若宮戸村(現千葉県市川市中山)に住するようになったと伝えられる。常忍は御家人、あるいは下総の守護千葉介頼胤の有力な被官(家臣)とする二つの見方がある。

日蓮が常忍に宛てた書状は文永六年(一一八九)以降、弘安四年(一一八二)の一三年間にわたり、二四通の真筆が現存している。その中、先にも触れたとお

り漢文体の書状は一通を数える。

こうした漢文体の書状が送られた信者は、常忍の他に僅か六名にすぎず、常忍は信者の中でも高い教養を持ち、日蓮に仏教の法門を尋ねるなど、仏教についても精通していたことが伺える。とりわけ注目されることは、日蓮の信仰の根幹的著作である『観心本尊抄』を流罪地佐渡から常忍のもとへ送り、閲読と保管を求めたことである。

常忍の日蓮に対する外護も厚く、日蓮が佐渡配流の時には入道を遣とし、また佐渡流謫中には紙、墨、筆などを届けさせ、日蓮が身延山に入ってからからは妻の尼御前と共に銭や米などを供養している。

弘安五年（一二八二）日蓮没後、常忍は日常と名乗り、僧となつて持仏堂である若宮の法華堂を法華寺と改め自ら貫首となり、それ以後、僧として信仰を勧め活躍をしている。永仁七年（一二七九）三月三日、常忍はつぎのような置文を記している。

一、日蓮の御書並びに六〇巻以下の聖教等を寺中に出すべからざるの事。

一、聖教殿居の事。一、当（法華）寺並びに本尊並びに本尊聖教は帥殿（日高）に付し奉り、弘法寺を兵部阿闍梨（日揚）に申し付け候。日常他界の後はこの両寺において、日常存生の如く思い成し。

と、講会以下の勤め先々の如く緩急なく行われるべきを定め、同月六日自身で蒐集した経論、日蓮より授与された本尊、仏像等及び日蓮自筆の書状、要文等の目録を作製した。この目録は「常修院本尊聖教事」と名付けられ、「常師目録」と通称されている。

先の置文にいう御書聖教の寺外不出、殿居は宿直による保管のためで、これらは後世に残そうとしてのことである。

こうした常忍の真蹟蒐集と保存は、法華経寺三世の日祐に引き継がれ、以来最も多くの日蓮真筆を伝承している。所伝によれば常忍はこの目録作製の半月後三月二〇日、八四歳で示寂している。

では、つぎに富木常忍宛仮名消息七通について考察していきたい。

三、富木常忍宛仮名消息七通について

富木常忍宛仮名消息七通の筆跡を年代順に見ると、（一）身延山入山直後まで、（二）身延山入山初期、（三）身延山入山中期、（四）身延山入山後期の四期に分類できるようである。七通の消息を以上の分類に随つて掲載すると、つぎのようである（「」内の数字は推定年代、「」の無いものは年代が確定できるものである）。

（一）身延山入山直後まで

①「土木殿御消息」〔文永六年（一二五九）六月七日（四八歳）。

京都府 立本寺蔵 二九・六×三五・〇 cm 一幅

〔釈文〕

大師講 蒙仰候はん。

事。今月 又御指合

明性房にて にて候わハ、

候か、此月ハ 他處へ申

さしあい候。 へく候。

余人之中、 恐々謹言。

せんと候人 六月七日

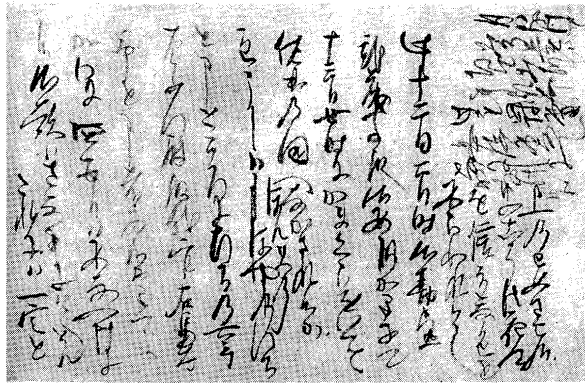
候ハハ申セ給 日蓮（花押）

と候。貴邊 土木殿

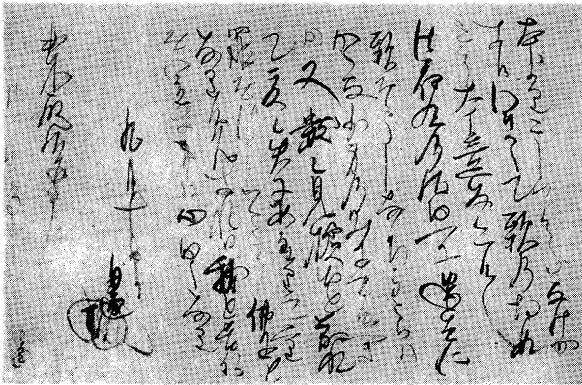
如何。



②「土木殿御返事」文永八年（一二七二）九月一五日（五〇歳）。
 京都府 本満寺蔵 二九〇×八八・四 cm 一巻



第一紙



第二紙

〔釈文〕
 月八かけて
 みち、しをハ
 ひてみつ
 事疑なし。
 此も罰あり、
 必徳あるへし。
 なにしに
 かなげかん。
 上乃せめさせ給
 にこそ、法花経
 を信たる色も
 あられ候へ。

〔第一紙〕
 此十二日酉時御勘気。
 武蔵守殿御あつかりにて、
 十三日丑時にかまくらをいて、
 佐土乃國へなかされ候か、
 たうしハほんま乃江ち
 と申ところに、江ち乃六郎
 左衛門尉殿代官右馬太
 郎と申者あつかりて候
 か、いま四五日ハあるへけに
 候。御歎ハさる事に候へとん、
 これには一定と

〔第二紙〕
 本よりこして候へハなげか
 す候。いま、て頸乃切ぬ
 こそ本意なく候へ。
 法花経乃御ゆへに過去に
 頸をうしなひたらハ、
 か、る少身乃みにて候へき
 か。又数々見擯出ととかれ
 て、度々失にあたりて重
 罪をけしてこそ佛にも
 なり候ハんすれハ、我と苦行
 をいたす事ハ心ゆくなり。

九月十五日

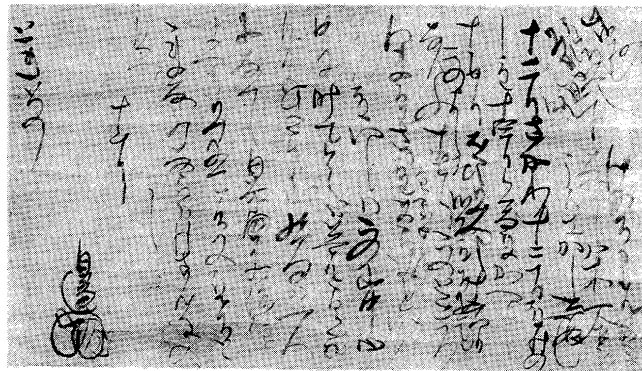
日蓮（花押）

土木殿御返事

御返事

日蓮

③「富木殿御書」文永十一年（一二七四）五月一七日（五三歳）
 千葉県 鏡忍寺蔵 二六・六×四八・五 cm 一幅



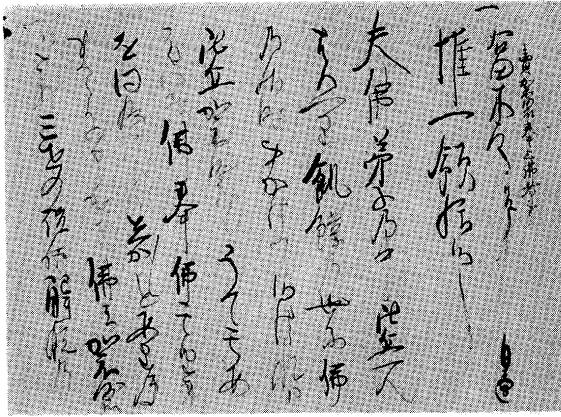
〔釈文〕
 此御房
 たちも
 みなかへし
 て、但一人
 候へし。
 けち申はかり
 なし。米一合も
 うらす。かししぬ
 へし。

十二日さかわ、十三日たけの
 した、十四日くるまかへし、
 十五日を、みや、十六日
 なんふ、十七日このところ、
 かたらせ給。
 いまたさたまらすとい江
 とん、たいしハこの山中心
 中に叶て候へハ、しはらくハ
 候ハんすらむ。結句ハ一人
 になて日本國に流浪
 すへきみにて候。又たちと
 、まるみならハけさんに入
 候へし 恐々謹言
 十七日
 ときとの
 日蓮（花押）

(二) 身延山入山初期

④「富木殿御返事」〔文永二年(一二七五)二月七日(五四歳)。

千葉県 中山法華経寺蔵 三二・二×一七七・五cm 一巻



第一紙



第二紙

〔釈文〕

(第一紙)

売袈裟奉上佛者事。

富木殿御返事

日蓮

一 唯一領給候了。

夫佛弟子乃中比丘一人

はんへり。飢饉乃世に、佛

乃御時事かけて候けれハ、

比丘袈裟をうて其あ

たいを佛奉。佛其由来

を問給けれハ、しかくとあり乃

ま、に申けり。佛云、袈裟

ハこれ三世の諸佛解脱乃

(第二紙)

二

法衣なり。このあたひをハ我

ほうしかたしと辞退

しまし、かハ、此比丘申。

さてこの袈裟あた

ひをハいかん、せんと申けれハ、

佛云、汝悲母有不。答云有。仏

云、此袈裟をハ汝母に供養

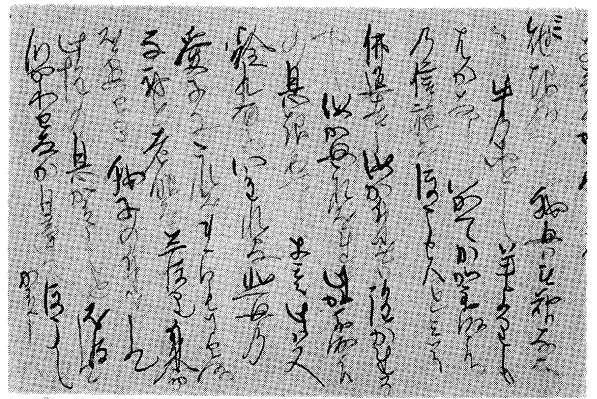
すへし。此比丘佛云、佛ハ此三

界乃中第一の特尊なり。一切衆

生の眼目にてをハす。設十方

世界を覆衣なりとん、大地

にしく袈裟なりとん、



第三紙

(第三紙)

三

能報給へし。我母ハ無智なる

事牛乃ことし。羊よりも

はかなし。いかてか袈裟

乃信施をほうせんと云云。

佛返吉云、汝か身をハ誰か生そ

や、汝か母これを生。此袈裟

の恩報ぬへし等云云。此ハ又

齡九旬にいたれる悲母乃、

愛子にこれをまいらせさせ給

而我と老眼をしほり、生命

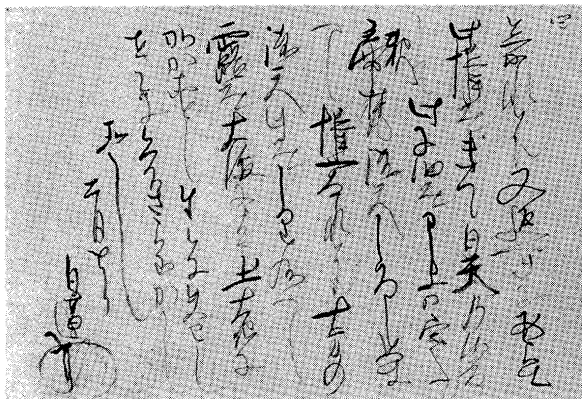
を盡せり。我子の身として、

此帷の恩かたしとをほして

つかわたせるか。日蓮又ほうし

かたし。

第四紙



(第四紙)

四

しかれとん又返へきにあらす。

此帷をきて、日天乃御前

して此子細を申上ハ、定て

釈梵諸天しろしめす

へし。帷一なれとん十方の

諸天此をしり給へし。

露を大海によせ、土大地に

加かことし。生々に失せし。

世々にくちさらむかし。

恐々謹言。

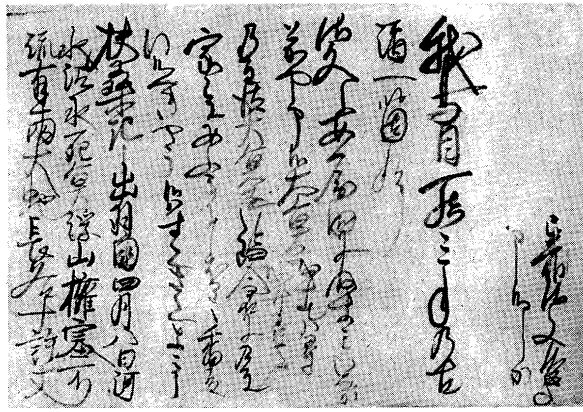
二月七日

日蓮(花押)

(三) 身延山入山中期

⑤「鼠入鹿事」〔建治三年(一二七七)〕日蓮五六歳。

京都府 立本寺藏 第一紙三三・四×四六・四。第二紙三〇・三×詳細不明 二幅



第一紙

〔釈文〕

(第一紙)

已前御文御返事
申候しか

鷲目一結三年乃古

酒一箇給了。

御文云安房國にねすミいるか

とかや申候大魚或十七八尋

或廿尋云云。

乃至彼大魚を鎌倉に乃至

家々にあぶらにしほり候香た

江候へきやう候ハす。くさく等云云。

扶桑記云出羽國四月八日河

水泥水死魚浮山擁塞不

流有両大蛇長各十許丈。

(第二紙)

二

相連流出入於海江。小蛇隨

者不知其數。依河苗稼流

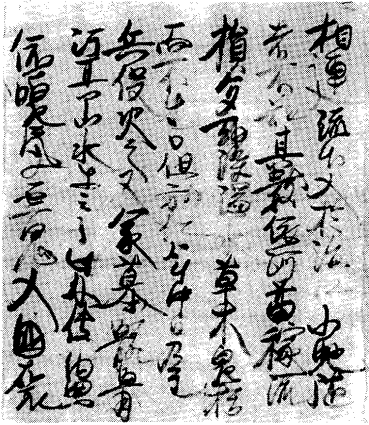
損多。或没濁水草木梟朽

而不生○但弘仁年中○乃至

兵役火之。又塚墓骸骨

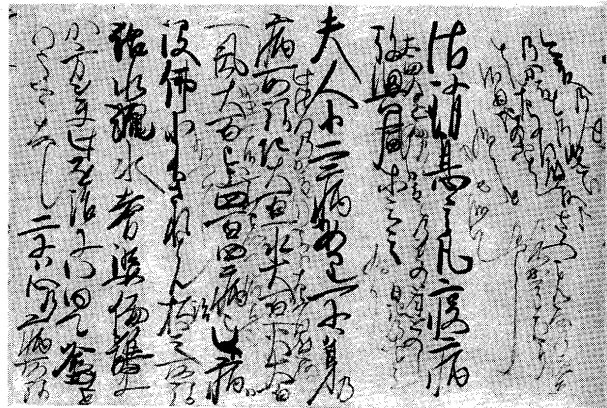
汚其山水等云云。此外傳内典

依曉氣惡鬼神入國聚



第二紙

⑥「富木入道殿御返事」〔弘安元年(一二七八)〕六月二十五日(五七歳)。
千葉県 中山法華経寺藏 三三・一×六四五 cm 一卷



第一紙

〔釈文〕

今度乃人々

乃かた／＼乃御さい

とん、左衛門尉殿乃

御日記のことく

給了と

申七給候へ。

さへもん殿乃便宜
乃御かたひら
給候了。

(第二紙)

御消息云。凡疫病

太田入道殿乃かた／＼乃もの、ときとの、

弥興盛等云云。

日記乃ことく

給候了。

夫人に二病あり。一に八身乃

此法門乃かたつらハ、左衛門尉殿に

病。所謂地大百一・水大百一・火大百

かきて候。こわセ給て御らむ

一・風大百已上。四百四病也。此病ハ

有へく候。

設佛に有されとん持之。所謂

治 水流水・普婆 偏鵠等

か方薬、此を治にいゆて喰すと

いう事なし。二にハ心乃病所謂

(第七紙)

七

先代未聞乃三災七難起るへし。

所謂去・今年、去正嘉等乃疫病

等也。

疑云、汝か申かことくならハ、此國法花

經乃行者をあたむ故、善神此國を

治罰する等ならハ、諸人の疫病而るへし。

何汝弟子等又やみ死や。答云、

汝不審最も其謂有か。但一方を知て

一方を知ざるか。善と悪とハ、無始より

乃左右乃法也。權教并諸宗乃

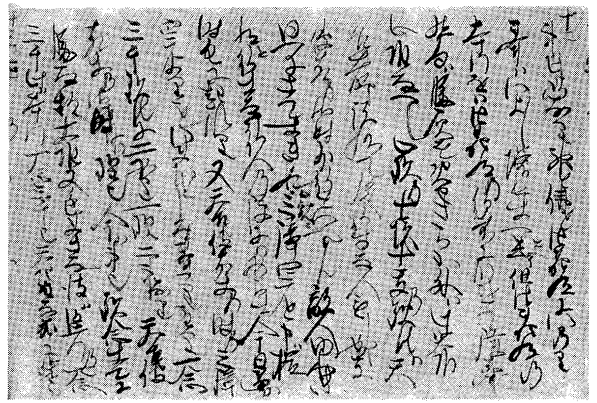
心ハ、善悪ハ等覚に限る。若尔者等覚

までハ、互二失有へし。法花宗乃心ハ、

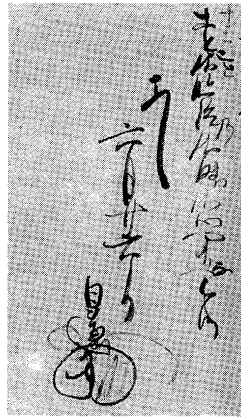
一念三千。性悪・性善、妙覚乃位二猶

備れり。元品法性ハ梵天・帝釈

等と顯れ、元品乃無明ハ第六天乃魔王と



第一二紙



第一三紙

(第二紙)

十二

事、此始なり。神と佛と法花経にい乃り奉ハ、いよく増長すへし。但法花経乃本門をハ法花経乃行者につきて除奉る。結句ハ勝負を決せらむ外ハ、此災難止難るへし。止観乃十境十乘乃観法ハ、天台大師説給て後、行する人無し。妙樂・傳教乃御時少行といへんと、敵人ゆわきゆへにさてすきぬ。三障四魔と申ハ、権

経を行する行人乃障にハあらず。今日蓮か時具に起れり。又天台・傳教等乃時乃三障四魔よりも、いまひとしをまさりたり。一念三千観法に二あり。一理、二事なり。天台・傳教等乃御時にハ理也。今ハ事也。観念すてに勝る。故大難又色まさる。彼ハ迹門乃一念三千、此ハ本門一念三千也。天地ハるかに殊也(第一三紙)

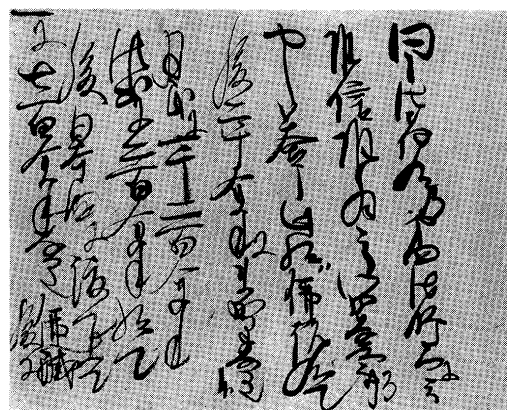
十三
こと也と、御臨終乃御時ハ御心へ有るへく候。恐々謹言。

六月廿六日

日蓮(花押)

(四) 身延山入山後期

⑦「諸経與法華経難易事」(弘安三年(一二八〇))五月二六日(五九歳)。千葉県 中山法華経寺蔵 三〇・五×四三五・七cm 一巻



第一紙

(釈文)

(第一紙)

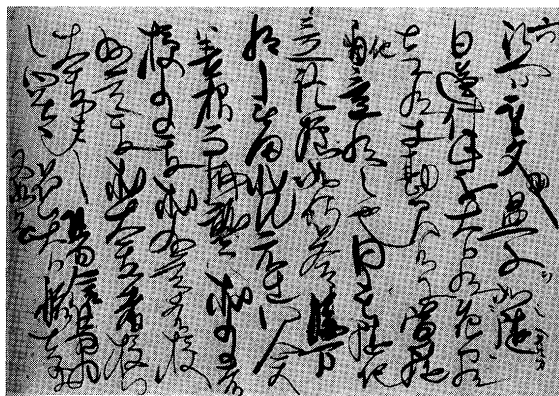
問云、法花経乃第四法師品に云、難信難解云云。いかなる事をや。答云、此経ハ佛説給て後、二千余年にまかりなり候。月氏に一千二百余年、漢土に二百余年経て後、日本國に渡てすてに七百余年なり。佛滅後に

一

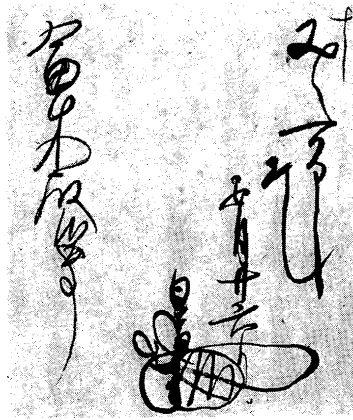
(第六紙)

六

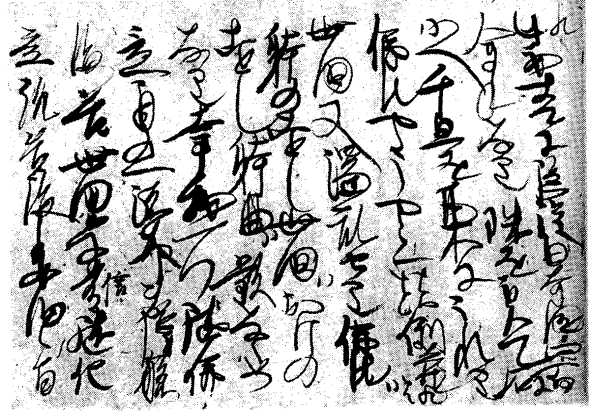
譬へハ聖父か愚子を如隨。日蓮付此義大日経・華嚴経・涅槃経等勘見候に、皆隨他意経々也。問云、其隨他意證據如何。答云、勝万経云、無聞非法衆生以人天善根而成熟之。求縁覚者授聲聞乘。求縁覚者授縁覚乘。求大乘者授以大乗云云。易信易解之心是也。華嚴・大日・般若・涅槃等又如是。



第六紙



第一〇紙



第九紙

(第九紙)
九

此義すてに隠没日本國四百
余年なり。殊をもんて石に
かへ、千旦(推)を凡木にうれり。
佛法やうやく顛倒しければ、
世間又濁乱せり。佛法ハ
躰のことし、世間ハかけの
ことし。躰曲ハ影な、め
なり。幸我一門。随佛
意自然流入薩般若
海。苦世間学者。信隨他
意沈苦海。委細之旨

(第一〇紙)
十
又々可申候。

恐々謹言。

五月廿六日

日蓮 (花押)

富木殿御返事

以上七通の消息について、先に挙げた四期の分類にしたがって、消息が書かれた時代背景や内容、筆跡について考察してみたい。

(一) 身延山入山直後まで

身延山入山直後までの消息は①「土木殿御消息」、②「土木殿御返事」、③「富木殿御書」の三通である。

①「土木殿御消息」

本書は折紙の書状である。内容は天台大師講の開催について、今月は明性房が当番になっているが差し障りがあるため、代わりに富木氏に依頼したものである。大師講とは、天台大師智顛(五三八―九七)の忌日である二四日に行う講会で、日本天台宗が行う霜月会(しもつきえ)を源泉とする。日蓮は文永三、四年頃から大師講を始めたと考えられ、晩年の身延山入山に至るまで大師講を営んでいるが、日蓮は天台大師の鑽仰と、門弟の結束、信仰の昂揚の場として大師講を重んじたものと考えられる。

本書状は、折紙に富木氏に対する依頼を大振りな筆致で認めたもので、このような書き振りは、堅紙の書状とは異なる折紙書状の特徴である。

折紙は紙の用法としては略式、薄礼。堅紙は正式、厚礼とされている。日蓮の折紙の消息は一四通が現存している。文永以前と推定されるものが二通、文永期が三通、健治、弘安期が一〇通である。内容的に見ると、供養に対する礼状が九通、依頼文が四通、秘書携帯の注意書きが一通で、供養に対する礼状が圧倒的に多く、九通のうち、建治、弘安期が八通で、この時期に多い。内容も様式の通り、簡易的なものが多く、書きぶりも大振り、堅紙とは異なる折紙の特徴が見られる。

②「土木殿御返事」

本書は文永八年（一二七二）九月一日、日蓮五〇歳の時の書状で、相模依智より富木氏に宛てて執筆したものである。

日蓮はこの日の一二日、鎌倉幕府の不興を受けて逮捕され、佐渡流罪との判決が出される。そこで、一二日深夜鎌倉を出発するが、途中死刑場、竜口へ曳かれ斬首されそうになる。不測の出来事によって斬首を逃れ、佐渡流罪の途につく。本書は、佐渡へ出発する前に、佐渡の守護の守護代本間六郎左右衛門の領地、相模の依智に仮抑留され、そこから富木氏に宛てた書状である。

内容は、上記のように一二日、鎌倉を出発してから依智までの行程を述べ、斬首されなかったことは殉教死を望む身としてはむしろ不本意であり、仏法のためにこのような苦行をすることは、むしろ悦びである、とその心境を伝えている。

筆跡を見ると、文字の大きさ、行間はほぼ一定で、紙面全体に書き込むように認めている。第二紙は各行とも行末にいくにしたがって右に傾斜している。

③「富木殿御書」

本書は文永十一年（一二七四）五月一日、日蓮五三歳。身延山（山梨県）入山後最初の消息である。

文永十一年二月一日、鎌倉幕府は日蓮の佐渡流罪の赦免を発令し、赦免状が佐渡へもたらされたのは三月八日で、日蓮は一三日佐渡を発ち、一四日間を経て三月二十六日鎌倉へ入った。日蓮が鎌倉へ入ったのは国主が法華経に帰依するよう諫言するためであるが、四月八日諫言が受け入れられなかったため、鎌倉を退出し、身延山に隠棲することとなる。本書は身延山入山第一通目の書状となる。

書状の内容は、五月一二日鎌倉を出発してから同日一七日身延山に着くまでの行程を記し、食が乏しく飢え死にしようなほどであること、その為弟子たちも皆返して一人で過ごしたいと思っていることなど、身延での心境を率直に語っている。

本書の筆跡を見ると、線質の太さ、紙面全体の書き振りなど前書に近いことが解る。

以上三通の書状をみると、①は折紙の特徴として重要な用件ではなく、大師講当番の依頼という、簡易的な内容を大振りな筆致で認め、②③は共に自身の心境について語ったもので、行間を詰めて紙面に隙間無く書き込まれている。

(二) 身延山入山初期

身延山入山初期の消息は、④「富木殿御返事」の一通である。

④「富木殿御返事」

本書は推定文永十二年（一二七五）二月七日、日蓮五四歳。富木氏より供養された帷子に対する礼状である。

常忍の九十歳に届きそうな高齢の母が、息子のために帷子を縫った。常忍はその母の気持ちに有難くもつたいたいものと思ひ、帷子を身延の日蓮に供養した。日蓮は、常忍の思いを察し執筆したのが本書である。本書は七通の中で、最も日蓮と富木氏との間柄の親密さを示す書状と思われるので、簡略的にはあるが内容を確認しておきたい。

まず、帷子一枚確かに受け取ったことを大書して述べ、つぎのような説話が語られる。

昔仏弟子の中に一人の僧があり。飢饉のため自分の袈裟を売り、その代価を仏に供養した。しかし、仏は袈裟は諸仏が悟りを開くための修行に尊い法衣であるから、法衣を売って得られた価に報いることはできないと供養を辞退した。僧は、ではどうすればよいのか仏にたずねたところ、母に供養するよう告げられた。僧は、母は無知であり、どうして尊い袈裟の価に報いることができるのか仏に申し述べたところ、仏は、では自分を生んだのはいったい誰であるのか、必ず

母はこの袈裟の衤に報いることができるのである、と僧に告げた。

この説話を通して、日蓮は富木氏につきのよう述べている。

この度、私に供養された帷子は九十歳になろうとする貴方の母が、息子に着てもらうため仕立て上げたものである。しかも、老いた身で目をしばたせながら精魂込めて作った帷子で、貴方は老いた母が丹誠を込めて作った帷子を、子の身としてとても着ることができず、又、その恩に報いることができないと思い、日蓮に贈られたのでしょうか。日蓮もその恩に報いることはできないが、お返しするべきではないでしょう。この帷子を着て日天子にってんじにそのことを申し上げれば、必ず諸天もそのことをお知りになるでしょう。帷子は一つであるが、あらゆる所の諸天がそのことを承知されることでしょう。

そのように考えると、この帷子の功德は、一滴の露を大海にそそぎ、少量の土を大地に加えるようなもので、その功德はいつまでも朽ちることがないでしょう。

以上のような内容である。書状の内容から富木氏が日蓮に深い信頼を寄せて帷子を贈ったことが伺える。筆跡について、(一)と比較すると文字は大振りで行間も広くなっている。紙面全体を使って書かれているが、(一)と表情が異なり本書の方がゆつたりとして筆線も伸びやかである。

(三) 身延山入山中期

身延山入山中期の消息は⑤「鼠入鹿事」⑥「富木入道殿御返事」の二通である。

⑤「鼠入鹿事」

本書は推定建治三年(一二七七)日蓮五六歳。安房国で鼠入鹿という大魚が捕れ、その油を鎌倉の家々で使ったが、たとえようもなく臭ったこと、『扶桑略記』には悪臭について、魚の腐敗した臭、大蛇、小蛇が草木を腐らした悪臭、塚墓骸骨が山水を汚し、そのかもし出す腐臭などの記述があること、さらに仏典には、

悪臭によつて悪鬼が国に集まる事が述べられている。

筆跡を見ると、速筆であるが比較的行間が整い、第一紙は若干紙面を空けてから、供養の品「鶯目一結三年乃古酒一箇」が大書されている。前書④では「帷一領」と若干大きく書かれていたが、本書の場合特に大きく強調されている。

このように供養の品を大きく認めた書状は、同時代の書状には見られない特徴である。また、行間は詰めているが、(一)よりも文字は大きく、(一)(二)と比較すると線質が太く、力強い。

⑥「富木入道殿御返事」

「富木入道殿御返事」は弘安元年(一二七八)六月二六日、日蓮五七歳。日蓮の信者四条金吾が、身延の日蓮の許を訪ねることを聞き、富木氏が夏の施物として帷子や供養を日蓮に届けてもらうよう依頼したついでに、当時疫病が流行していることを報せたことへの返書である。

本書は、富木氏が日蓮に「凡そ疫病いよいよ弥いよいよよ興盛す」と書いて寄こしたことから、日蓮は疫病が流行する理由を仏典の中に求め、それを富木氏に認めたものである。長文のため内容を要約するとつぎの通りである。

日蓮が富木氏や四条氏に対し、世間の疫病に比べ仏教の誤った病が重大であることを説いている。内容は大きく二つに分けることが出来る。第一段落では病は身体と心の病があり、身体の病は名医によつて治すことが出来るが、心の病は正しい教えに拠らなければならぬとしている。第二段落では第一段落を受け、今の日本の仏教についての考えが誤っていると厳しく批判し、疫病の流行はその為であるとしている。そして、時代と信仰のあり方について富木氏に語っている。

ところで、本書の年代についてであるが、本書と同日に「中務左衛門尉殿御返事」を、前日六月二五日には「日女御前御返事」を認めている。共に「富木殿御返事」同様疫病について触れている。鈴木一成著『日蓮聖人遺文の文献学的研究』では、この疫病流行の記述からもこれら三書が同年である根拠とされている。

「日女御前御返事」は、一行から二行の断簡が四片と、巻末部七行の断片が現存している。全文は京都本満寺所蔵の写本によって知ることができ、富木殿御返事よりもさらに長文であったことが解る。

また、「中務左衛門尉殿御返事」は六紙からなり、現在京都立本寺に所蔵されているが、これらのことから日蓮は「富木殿御返事」を認める前日より疫病について長文の手紙を認めていたことが理解できるのである。

ところで、当時疫病が流行していた事を知る記述として、洞院公賢とういんきんたか（一二九一—一三六〇）の日記『園太暦』につきのような記述が見られる。

「建治三年、秋以来天下病患流布、

同年十二月六日、宣旨云、去秋以降普天之下病患流行、黎庶懊惱、非仰仁王之冥威、争救万民之危命、始自今月十日三ヶ日、於法勝寺、囑当时之臥雲、転読件経卷、攘率土之瘴煙、消除此災々、其佛僧供料、用本寺物者、

同月廿九日、宣旨云、仰五畿七道諸国、為攘流布之疾疫、早随官符之到来、

拵定吉日、令転読仁王・般若経者、

同四年二月廿九日、改元、弘安、依疾疫流行也、
弘安元年五月廿六日、被行軒廊御卜、又召廿二社々司、世間病事可被祈請之由御祈、奉行職事被下知云々、

とあり、建治三年秋以降からすでに疫病が流行し、その災難を攘うため、法勝寺で仁王経が転読されたこと。同年十二月二十九日には宣旨によって五畿七道の諸国の疫病を攘うため、仁王般若経が読まれたこと、疫病の流行のため、弘安に改元され、同年五月二十六日には卜うらなひにより、一二の社の社司が召され、世間の病が治まるよう祈請されていたことが解る。

「富木入道殿御返事」はこうした背景のもとに認められている。筆跡を見ると、まず、書き始めは大文字で、第二紙から徐々に小振りになり、行間も狭まり、速筆で紙面に隙間無く書き込まれている。このような書き振りは(一)と同様であるが、本書は(二)に比べ、線質が太くなり、(二)よりも筆勢の強さを感じさせる。

(四) 身延山入山後期

身延山入山後期の消息は、⑦「諸経與法華経難易事」の一通である。

⑦「諸経與法華経難易事」(弘安三年)

「諸経與法華経難易事」は弘安三年五月二十六日、日蓮五九歳。本書状は、仏教の法門について富木氏が日蓮に尋ねたことに対する返書である。日蓮は、今正しい仏法が隠れ世間は混乱した状態になってしまっていることを述べ、「世間は体」「仏法はかげ」であるから、正しい教えによって世間の秩序や仏法を立てなければならぬと富木氏に語っている。

本書の筆跡について、(一)から(三)までの縦紙の書状と比較すると、速筆、奔放な筆使いという面では共通しているが、本書はさらに線が太く文字も大振りで、筆使いがさらに自由闊達になっている。この点において明らかに書の変遷過程を伺うことができる。

以上、富木氏宛の仮名消息七通について四つの分類にしたがって考察してきた。内容からみた場合、①は大師講当番の依頼について、②③は自信の心境を語ったもの、④は富木氏の帷子供養の気持ちを感じて認めたもの、⑤は安房国で捕れた大魚について、⑥⑦は共に当時の仏教信仰を批判したものであった。

筆跡を見ると、従来指摘されているように奔放で自由闊達な筆使いであること。しかし、それは一様ではなくその時々に応じた書き振りであることが理解できた。それらの違いについて、つぎのような点が挙げられる。

(一) 料紙の違い(縦紙と折紙では内容の軽重があるが、書き振りにもそれが現れていること)。

(二) 紙数の違い、紙数の長いものと短いものでは筆の息づかいも異なっていることが挙げられる、紙数の長いものは従来の指摘のように言葉があふれ出すように脈々と綴られている様子が伺える。

また、自信の心情を語ったものは短く、当時の仏教を批判した内容では長文であることが確認できた。年代的に見ると、長文の書状は身延山入山中期以後である。

(3) 書式について若干触れておきたい。署名、花押の位置が、通例とは異なり日付の左下に書かれている。例えば、同時代の親鸞や叡尊などの書状を見ると、日付の真下に署名花押が書かれている。なぜこのような位置であるのかについては今後の課題としたい。

(4) 年代による書風の変遷、縦紙の書状についてみると、まず(一)身延山入山直後までの書状では、速筆で行間が詰めて書かれ、紙面に隙間無く書き込まれていた。(二)身延山入山初期の書状では、(一)に比べ、文字は大振りで行間も広く、筆線も伸びやかでゆったりとした息づかいで書かれていた。(三)身延山入山中期では、速筆で(一)のように行間は詰めているが、線質は太く文字も大振りで、力強い書き振りであった。(四)身延山入山後期では、(一)～(三)よりもさらに線質が太く、文字も大振りになり、筆使いがさらに自由闊達になり、書の変遷過程が確認できた。

ところで、このような書風の画期は、前年に『書道学論集』3で著者が考察した、花押や署名、宛所や日付の書き振りの変化とも若干の年代の違いはあるが一致する点が見られる。

例えば、署名「蓮」の草冠の書き振りは、文永二年二月七日「富木殿御返事」から、建治二年閏三月二四日「南條殿御返事」までとその前後とは、違いが見られる。本稿では(二)の画期と一致している。花押文字の特徴として弘安元年六月以降を境に変化が見られるが、本稿では一年の違いがあるが(三)の画期と一致している。署名の特徴として弘安四年三月二一日以降「蓮」のしんにょうの筆端が上に出る特徴が見られるが、本稿では一年の違いはあるが(四)の画期としてみることもできるようである。

四、おわりに

以上、日蓮筆富木常忍宛仮名消息について、消息の書かれた背景や内容、年代的な書風の変遷について考察してきた。すでに前項によって結論を述べているので詳細について触れないが、理解できたことを簡潔に述べてみたいと思う。

日蓮の消息は形式に捕われず自由奔放で、最も日蓮の人間性を表すものとされているが、それは一様ではなく、消息が書かれる料紙や内容、紙数や年代によって異なることが理解できた。書式においては署名、花押の位置が通例と異なっていたが、なぜそのような位置に記されているのかについては、先に述べたように今後の課題としたい。

年代的な書風の変遷について、四期に分けて考察を試みたところ、その画期は署名、花押、宛所、日付の書き振りの変化とも、若干の年数の違いはあるが一致する点が見られた。この点について、他の書状にも共通するののか、今後考察していきたい。

〈注〉

(1) 前半が漢字、後半が仮名で書かれた書状を指す。

(2) 『日蓮聖人真蹟集成』(以下『集成』と略記す) 全十卷(昭和五二年一月二五日、法蔵館)に収録されている日蓮真蹟の数である。

(3) 『日蓮宗事典』(昭和五六年一〇月一三日、日蓮宗宗務院)五六五～六頁。『日蓮聖人遺文辞典』(以下『遺文辞典』と略記す)(昭和六〇年五月六日、蓮本山身延山久遠寺)八〇七～九頁参照。

(4) 図版は『集成』第四卷九五頁。釈文は、真蹟対照現代語訳『日蓮聖人の手紙』(第一卷)富木常忍篇(平成二年八月一三日、東方出版)八頁参照。

(5) 図版は『集成』第四卷一〇二～三頁。釈文は『日蓮聖人の手紙』第一卷一九～二〇頁参照。

(6) 図版は『集成』第四卷二二八頁。釈文は『日蓮聖人の手紙』第一卷三一頁参照。

(7) 図版は『集成』第二卷一二四―七頁。釈文は『日蓮聖人の手紙』第一卷三四―三七頁参照。

(8) 『日蓮聖人の手紙』では「詰」に訂正されている。

(9) 図版は『集成』第四卷二二一―二頁、第二紙寸法を『集成』には九〇cmと記載されているが、第二紙は第一紙よりも短く、誤りであると思われるので、詳細不明とした。第一紙釈文は『対照録』中卷一八九頁、第二紙釈文は立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』第二卷（昭和二八年四月二五日、三省堂）一三六―五頁参照。

(10) 図版は『集成』第三卷二四―三七頁。釈文は『日蓮聖人の手紙』第一卷六八―七九頁参照。

(11) 図版は『集成』第一卷二二三―二二三二頁。釈文は『日蓮聖人の手紙』第一卷九四―一〇三頁参照。

(12) 『日蓮宗事典』五四三頁。

(13) 中尾堯著『日蓮真蹟遺文と寺院文書』（平成一四年三月一〇日、吉川弘文館）に日蓮筆折紙書状として一四通が挙げられている。その中で推定建長五年として富木氏宛の仮名で書かれた折紙書状が挙げられているが、推定年代について、検討を要すると思われるため本稿では挙げなかった。

(14) 鈴木一成著『日蓮聖人遺文の文献学的研究』（昭和四〇年四月八日、三喜房佛書林）三七―三七四参照。

(15) 『園太暦』（昭和一一年七月三〇日、太平洋社）

(16) 拙稿「日蓮仮名消息の年代について」―花押・署名・宛所・日付による考察―（『書道学論集』3、平成一八年三月三一日、大東文化大学院文学研究科書道学院生会、所収）

参考文献

〔資料〕

『昭和定本日蓮聖人遺文』全四卷

『日蓮聖人御遺文講義』第一七卷（昭和三三年一〇月二二日、日本佛書刊行会）

『日蓮宗宗学全書』第一卷上聖部（昭和三四年七月一〇日、山喜房仏書林）

『日蓮大聖人御真蹟対照録』上中下巻（昭和四二年四月二八日、立正安国会）

『鎌倉遺文』古文書編、第一七卷（昭和五四年一〇月三〇日、東京堂出版）

北川前肇・原慎定訳『日蓮聖人全集』第六卷（平成七年八月二〇日、春秋社）

〔著書〕

高木豊著『日蓮とその門弟』（昭和四〇年四月一〇日、弘文堂）

高木豊著『日蓮―その行動と思想』（昭和四五年五月、評論社）

笠松宏至著『日本中世法史論』（昭和五四年三月一〇日、東京大学出版会）

佐藤進一著『新版日本古文書学入門』（平成九年四月一五日、法政大学出版局）

峰岸純夫著『中世災害・戦乱の社会史』（平成一三年六月二〇日、吉川弘文館）

中尾堯著『日蓮聖人のご真蹟』（平成一六年五月二〇日、臨川書店）

北原糸子編『日本災害史』（平成一八年一〇月一〇日、吉川弘文館）